

## Special Essay

## 歴史はお金で買うものでなく創るもの

内科学講座(呼吸器・神経・膠原病内科部門)

星野 友昭

旭町キャンパスの私のお気に入りの場所のひとつは教育一号館のサロンの前にある桜の大木と動物実験センターから学生の部活のビルの裏まで続くその桜並木です。3月のはじめに菜の花が黄色い花を咲かせ、そして3月下旬から桜が咲きだす。菜の花畑に桜が咲いているのは見事です。水路の水面に花びらが浮いているのを見て、西行の「願はくは花の下にて春死なむ そのきさらきの望月のころ」の句を思い出すのは私だけ？ ただ、調べてみるとこれは現実の光景ではないそうだ。西行の時代、桜は弥生(旧暦3月)の下旬に咲き、旧暦2月15日に桜が咲くはずがないとのこと。つまり、現暦では5月の上旬に桜が咲くのが古典の常識。ちなみに今年(2013年)の旧暦2月15日(仏滅)は3月26日、すでに桜は散りがけ。きさらきの望月(旧暦2月15日)に地球温暖化のため桜が散る時代です。もう一つは大学本部がある建物です。木彫りの手すりや高い天井、照明も見事ですが、その存在自身が久留米大学の歴史を物語ってくれます。85年前に、久留米の田舎でこんな立派な建物をいったい誰が設計・施工したのか疑問でした。そこで、石橋正二郎顕彰会会長のI氏に尋ねたところ、“附属病院の建設は溝口理事長、田中病院長、私の3人づれで東京、大阪の各病院を視察し、設計は私に一任された。石橋正二郎：私の歩みより”。施工は松田平田設計とのことであった。設計は松田軍平・松田昌平兄弟設計。松田軍平氏は福岡県出身のコーネル大(NYC, USA)卒。三井財閥の本館(現中央三井信託銀行本店：平成10年重要文化財指定)を設計し初代の日本建築家協会(JAA)会長。現在の安藤忠雄氏ぐらいの売れっ子建築家であった。ちなみに田中病院長は当科(第一内科)の初代教授で石橋正二郎氏の叔父。ようやく合点した。

一方、残念なことがある。今回病棟の建て替えでなくなった旧東・西病棟の間にあった立派な日本庭園が取り壊され、旧病棟の正面玄関から続くぎんなんの並木

がかなり切られた。私の記憶では PET センター建設時には棕（むく）の大木だけでなく何本かの木も切られた。薬師寺道明名誉学長から戦後すぐの付属病院の写真を頂いた（図）。確かに医専建築前からの古い木である前述の棕（むく）と基礎2号館前の榎（えのき）2本の大木がある（詳しくは2011年4月号の永田見生現学長の Special Essay をHPで参照）。また付属病院には大きな中庭があり、中庭は棕（むく）の大木と榎（えのき）の大木へと繋がる道がある。おそらく石橋正二郎氏と松田軍平・松田昌平兄弟は患者さん、職員、医学生が散策できるように付属病院のマスタープランを設計したに違いない。いまでは昔の大きな中庭、棕（むく）の大木や桜並木に繋がる道はないだけでなく、新病棟には庭や緑がほとんどない。患者さん、職員、医学生が散歩できる榎（えのき）の大木、桜並木へと繋がる道のあるプランを作り実行するのは我々（職員、学生）の責務ではないのか？ 無計画では歴史ある建物や木がなくなる。歴史はお金で買うものでなく自ら創るものでないでしょうか。

